ブラジル経済（２０１４年第１四半期ＧＤＰの発表）

１．５月３０日、ブラジル地理統計院（ＩＢＧＥ）は、本年第１四半期のブラジルのＧＤＰ成長率が前期比０．２％、前年同期比１．９％となったと発表したところ、主なポイント以下のとおり（詳細別添参照）。

（１）第１四半期のＧＤＰは前期比０．２％となり、農業が３．６％、サービス業が０．４％の伸びとなる一方、製造業は０．８％のマイナスとなった。

（２）前年同期比では１．９％となり、農業２．８％、製造業０．８％、サービス業２．０％の伸びとなった。

（３）今四半期までの４四半期累計ベースでは、前年同期比２．５％となり、農業４．８％、製造業２．１％、サービス業２．２％の伸びとなった。

２．本件発表にかかる当国報道ぶり概要とりまとめ以下のとおり。農業が干ばつ等にかかわらず堅調であった反面、製造業の不振が顕著であり、投資もこれまでになく低調であったと報じている。

（１）３０日付バロール・エコノミコ紙（電子版）

（ア）今回の結果は、事前の本紙の調査対象となった２０のコンサルタントや金融機関の予測の平均に沿ったものとなった。調査において最低予測値は０．１％、最高予測値は０．６％であった。ＧＤＰの先行指標となる経済活動指標は２０１３年第４四半期０．３％であったため、今回の結果は先行指標を下回ることとなった。前年同期比は１．９％となったが、事前調査の予測平均は１．６％で最低予測値が１．３％、最高予測値が２％であった。

（イ）供給サイドを見ると製造業が前年同期比０．８％のマイナスとなっており、事前予測の平均値はマイナス０．３％であったため予想以上の下落となったが、農業に関しては事前予測平均が２．３％であったためこれを上回る結果（３．６％）を達成した。

（ウ）需要サイドを見ると家計消費が前期比０．１％のマイナスとなり、事前予測平均０．４％を下回り、政府消費は同０．７％の増加となり、事前予測平均０．４％を上回り、った。投資動向を示す総固定資本形成は同２．１％のマイナスとなり、事前予測のマイナス０．６％を大きく上回る落ち込みを見せた。

（２）３０日付エスタード・デ・サンパウロ紙（電子版）

（ア）本年第１四半期のＧＤＰはとりわけ製造業と投資の落ち込みが顕著で前期比０．２％の伸びに終わった。家計消費は実質横ばいである。弱含みの結果は、ルセーフ大統領が再選を目指す年、経済活動主体の信頼感が全体的に下降していることを明らかにするものとなった。ブラジル経済は数々の景気刺激策が採られたにもかかわらず２０１１年以降不安定なままであり、この状況は当分続きそうである。政権の経済政策チームの中にはこの状況は２０１６年のはじめまで継続するとの見方もある。

（イ）今回の結果に関し、本紙の事前調査では対象となった６５人のアナリストの予測平均は前期比０．２％であった。前年同期比は０．９％～２．５％の間とみられており、平均は１．９８％であった。中銀フォーカスは本年の経済成長率を１．６３％と見込んでいるが、政府はマンテガ財務大臣の発現に見られるように未だ２．３％の成長を見込んでいる。

（ウ）農業は前期比３．６％の伸びとなり、今回の結果をけん引した。農業専門家でパラナ州農業組合アドバイザーのマフィオレッティ氏によれば、本年の残りの期間も成長はプラスとなり穀物や畜産は引き続き堅調であるとのことである。年初干ばつによる被害をこうむったコーヒーやサトウキビも今後の国際価格の高騰により回復する見込みである。同氏はまた「小麦の生産が良い影響を与えるだろう。生産量は７百万トンを超え、昨年の５百万トンを大きく上回る。大豆の生産も好調で８１００万トンから８７００万トンの生産となる」と述べた。

（エ）脆弱な製造業の状況が経済成長に打撃を与えた。今回の結果はマイナス１．８％を記録した２０１２年第２四半期以降最低となっている。自動車関連産業や各種加工業が困難な状況となっている。これら業者の中には既に生産調整のために工場従業員に休暇を与えているところもある。

（オ）投資の対ＧＤＰ比率は１７．７％であり、第１四半期としては１７．０％を記録した２００９年以来最低となった。また貯蓄の対ＧＤＰも現在の統計が採られて以降最低の水準となっている。総固定資本形成が前期比マイナス２．１％となったのはマイナス２．２％を記録した２０１２年第１四半期以来最低となった（前年同期比も同じくマイナス２．１％となりマイナス４．２％を記録した２０１２年第４四半期以来最低となった）。（了）